

安楽寺寺報

聞光

第 6 1 号
報 恩 号
2011/11/1

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

妻を見送ら

信楽峻磨

去る九月二十五日、私の荆妻が死
去いたしました。それ以来心淋しい
日々が続きます。六年前に、子ども
夫婦と孫二人らによって金婚式のパー
ティーを開いてもらいましたが、今
では懐しい思い出となりました。

私の今までの人生は、学者として、
念仏者としての生涯でしたが、ただ
ひたすらに親鸞の心を探ねながら生
きてきたわけで、そこではその必然
として、いつも世俗の動向、現実の
教団体制とは矛盾し、対立すること
が多々ありました。しかしながら、
私はつねに親鸞の心をもっとも優先
させながら学問し、生活し、そのこ
とをいわずに書いてまいりました。
そのゆえに、私の生涯は、いつも本
願寺教団からは、非難され、弾圧さ

れ、排除されて、まったく孤立して
今日に至っております。

そのことについて、私は自分の信
念によってそうなったことですから、
何事があるうと
もすべて甘受し
てきました。が、
私の妻はそのた
めに隣ながら色々
と苦労いたしま
した。まことに
済まないことだ
あったと思いま
す。しかし妻は
時には私のため
に弁明し、さま
ざまに助力して
くれました。私
の今日があるの
は、ひとえに妻
の信頼とその支
援があったから
こそであります。

そのことをめぐっては、私と妻の
関係は、あたかも針と糸みたいな仲



で、私はただひたすらに自分の思い
のまま運針をすすめてきました。が、
妻はいつもよく私の針の後を、強い
糸をもって縫いあげてくれました。
時には堅い布もあり、また時には二
枚も三枚も重なった布もありました
が、いつも私の針の跡をきっちり
縫いあげてくれました。今もその縫
い目の跡があざやかに残っております。
そういう意味では、私の学問と
人生は、妻と私
の二人三脚で築
きあげたような
ものでもありま
す。

妻はその晩年
に、「また来世
も夫婦になろう
ね」とよく申し
ておりました。
私自身はかえり
みてあまりいい
亭主でもなかつ
たわけですが、
そういわれてあ
りたがたいこと
だと、波瀾万丈
の二人の人生で
あったと今に思
うことではあり
ません。

日本語の「さよなら」という言

葉は、もともとは接続詞としての、
「さよならならば」「さようであるなら
ば」という語が、変化して生まれた
ものだと思います。そしてその「さ
よならならば」とは「しからば」「そ
れならば」ということを意味し、今
までのことを総括して、これから新
しいことをはじめるといふ、心の構
えをあらわすわけです。だからこの
「さよなら」という言葉には、い
ままでの過去を諦めくるといふこ
とと、これからの未来に向かって、
新しい道を求めて歩いていくといふ、
両方の意味が込められているのです。
いまの私は、妻と死別して淋しい
日々が続きますが、まさしくそうい
う「さよなら」といふ言葉が意味
する通りに、今までの過去の日々
を懐かしく思いおこしながら、こ
れからの未来に向けて、残る生命を
いっばいに生きていきたいものと
念じていることです。とはいえず、妻も
ひとりぼっちでは淋しいことでは
りから、適当のときで「さよなら」
をして、早く彼女のところに行って
やりたいと思う昨今です。

親鸞聖人七十五〇回大遠忌法要



かけ座のデント、入場行列

大型スクリーンに映る法要の様子

御影堂内の様子

阿弥陀堂から続く縁側の行列(諸僧入堂)

御礼 大変お世話になりました 釋尼華香(信楽美代子前坊守)往生

9月25日、安楽寺前坊守、信楽美代子が往生いたしました。生前中は門信徒の皆様、幼稚園関係者の皆様、地域の皆様に本当にかわいがっていただき、又お世話になりありがとうございました。

ここ安楽寺で生まれ育ち、ひかり幼稚園を設立し、設立当初は前住職と結婚後、京都と呉とで夫婦別々に暮らして、幼児教育に尽力して参りました。その心が、ひかり幼稚園の60年を越える歴史となり、5千人近くの卒園生を送り出すことができたみなもとだと思います。

お世話になりました皆様に心より御礼申し上げます。また残りしました者も、安楽寺、ひかり幼稚園を運営しつつ、より一層多くの皆様の幸せを実現するためにがんばって参りたいと思います。今後とも皆様のご協力並びにご支援をお願い申し上げます。

安楽寺住職 ひかり幼稚園園長 信楽晃仁

信楽峻磨前住職 第45回仏教伝道文化賞受賞



10月12日安楽寺前住職が、仏教伝道協会(東京)から第45回仏教伝道文化賞を受賞いたしました。

3月17日に東京で授賞式の予定でしたが、3月11日東日本大震災があり、延期となっております。当日は広島、京都、東京からも前住職の教え子が駆けつけて盛大な受賞式並びに祝賀会でした。

追悼 信楽美代子

安楽寺前坊守

ひかり幼稚園創設者

九月二十五日、母信楽美代子が往生いたしました。そして、九月二十七日の葬儀が終わった直後、前住職が出講先から一冊の本を持って帰りました。母が寄稿した一文が載った本をそのお寺の方が下さったようでした。それを読んだときに、母の幼児教育に対する姿勢が、遅ればせながらはつきりとわかったような気がします。その本は本願寺中央幼稚園指導講師であった一花一枝先生という先生の一周忌に出版された追悼集でした。その追悼文から母の幼児教育にかけた願いを味わいたいと思います。

「追悼集 いちはなせんせ」より

◇母のような優しさ◇

信楽美代子

一花先生との出会いは、昭和二十六年の春、私が京都女専を卒業して、さまざまな悩みを抱いて、京都幼稚園の先生をお訪ねし、お導きいただいたことによりです。当時の私にとっては、学校で身に

つけたことはすべて観念であって、現場における幼児教育に対する具体的な認識はまったく不足しており、父母の理解を求めるところでも大変なことでした。その中で私が悩み迷った一番の問題は、幼稚園は文字や数字も教えてもらえるところだといふ父母の考えに、どう対応するかということでした。じじつ当時あちこちの幼稚園の教室の壁には、文字や数字の絵が張られておりました。そこである日、先生にこの迷いを打ちあけましたところ、先生はすぐに一言、

「それはあなたに信用がないからよ」といわれました。何か効果的な対応策を教えていただくことが出来ると思っていた私には、この言葉は胸に

「グサリ」と突きさりました。あの時のことは、いまもはつきりと記憶に残り、いつまでも忘れることができません。いつもの優しい先生のお姿からは、思いもよらぬ厳しいお言葉でした。いま考えると、まったく先生のお言葉のとおりです。私はこの時、先生から幼児教育に対す

る厳しさ、保育者としてのあるべき姿勢を教えられました。でもその夜、先生は私を四条河原町のレストラン「羅生門」にさそって、夕食をご馳走してくださいました。その時の先生は、ほんとうの母のように、優しい言葉をいろいろかけてくださいました。「厳しさの中の優しさ」「優しさの中の厳しさ」。それから私にとって、このことは、もっとも心ひかれる先生の魅力になりました。

以来三十年間、広島と京都との往復の生活を送る中で、公私どももお導きをたまわり、可憐がっていた

私はいままでのお勤めの後、涙で話ができなくなりました。ありがたく、もったいなく、かたじけなく、感極まったようでした。お釈迦様ご出世の御恩を身に受けた姿に、同行した私たちは心打たれ、様々なことを考えさせられました。「ようこそ親鸞さまお出まし下さいました。」と親鸞聖人のご恩とご苦労にお礼を申しつつ、心から報恩感謝をされた人がどれほどおられるのだろうか。どう考えても、そのご恩にお礼を申すよりも、イベントに参加している人が多く、この賑やかな法要が持つ意味は何だったのか。

この一文を読んで、私たちはよく「時代が変わった、時代が変わった」といいますが、昔も今とちつとも変わっていないと思うのです。人は同じことで悩み、苦しんでいるように思います。しかし問題は人ではなく「あなたに信用がないから」でした。それは自らも自分を信用していない。だから不安の中で迷い苦しんでいるように思います。幼児教育、いや全ての教育の基本はここなんだと、母は教えてくれたように思います。この寄稿文を読んで、母の生き方の基本にあった「厳しさの中の優しさ」「優しさの中の厳しさ」の原点がここにあったのだと納得がいきました。母の作ったひかり幼稚園。この幼稚園が急激な少子化の中で今後どうなるか。それはその中にいる人によるのだということを心して、遺志を



した。(全文掲載)

聞思 七五〇回大遠忌 信楽晃仁

今年に親鸞聖人七百五十回大遠忌の年で、京都本願寺では春からずつと大遠忌法要がお勤めされています。大遠忌は五十年に一度のご縁です。で現在五〇歳の私の人生において、この度のご縁がありません。そのご縁にあることができませんでした。

十月十三日の法要に合わせていただき、当日安楽寺からは十八名が参加し、今回はバス七台、総勢二五〇名の大団体での参拝でした。

朝五時過ぎに呉を出発し、一路京都へ向かい、お昼からの法要に合いました。全国から集まられたお同行は従来の御影堂だけでは収容できません。そこで外の廊下からかけ座をして、堂内の空間を大きく広げての法要でした。三千人強をイス席で収容する空間になっていました。安楽寺はその中で、安芸南組では二番目にいい席でしたが、それでも本来の堂内には入れず、廊下かけられたかけ座の上でした。人と柱、そして距離が遠く、ご本尊は拝めませんの

で、あちこちに設置されたスクリーンと、モニターテレビを見ながらのご縁でした。最初に橋本長のお話。その後、短い法話があり、そして縁備(諸僧入堂)でしたが、これほどたくさん

の諸僧並びに楽人(箏や笙などの雅楽を演奏する人)の行列は見たことがありませんでした。そして音楽法要のお勤めをして、御門主、新門様からお言葉をいただき、法要は終了いたしました。その法要に合いながら、ふと思っただけです。不遜な思いかもしれませんが、「この法要は何のためにするんだらう」と「五十年に一度の御勝縁」とあります。確かに私もそう思っ

たので、現実にはその法要の場に座してみても、この準備をされた人は何を願う、ここに参った人は何を思われたらうかと、自らに問いつつ思うのです。本堂に五十年に一度の「勝縁」になり得たのであるうかと。十数年前ある先生にインドに連れて行っていただきました。その先生がお釈迦様がお悟りを開かれた地、ブツ

ダガヤでのお勤めの後、涙で話ができなくなりました。ありがたく、もったいなく、かたじけなく、感極まったようでした。お釈迦様ご出世の御恩を身に受けた姿に、同行した私たちは心打たれ、様々なことを考えさせられました。「ようこそ親鸞さまお出まし下さいました。」と親鸞聖人のご恩とご苦労にお礼を申しつつ、心から報恩感謝をされた人がどれほどおられるのだろうか。どう考えても、そのご恩にお礼を申すよりも、イベントに参加している人が多く、この賑やかな法要が持つ意味は何だったのか。

それが安楽寺の永代経法要で読んだ表白文にありました。法要の意味は、この法要を機縁として信心を得ること、それこそが法要の意味だと。さて、この

Table with 4 columns: 報恩講 (12月3-4日), 御正忌 (1月14日), 涅槃会 (2月12日), 彼岸会 (3月11日). Includes dates, times, and speakers for each event.

2012(平成24)年度の各法要のテーマにつきましては、年間カレンダーでお知らせいたします。